慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	聊斎詩研究序説
Sub Title	An introductory treatise on Pú Song-Ling's poems
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1983
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.45, (1983. 12) ,p.88- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00450001-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聊斎詩研究序説

八木章好

一　序
二　聊斎詩の流伝
三　聊斎文庫所蔵の資料
(一)　聊斎文庫について
(二)　聊斎文庫所蔵の聊斎詩集について
(三)　蒲松齢自筆詩稿『聊斎草』について
四　聊斎詩研究の課題

一　序

蒲松齢（一六四〇―一七一五）と言えば、清初の怪異小説集『聊斎志異』の著者としてのみ知られている。実は小説ばかりでなく、他にも文、詩、詞、戯、俚曲、実用書など多岐に亙って数多くの作品を遺しているのであるが、これら『聊斎志異』以外の諸作品についての研究は寥々たるものであり、特に比較的資料の多い詩に関しては、テキスト自体がまだ十分に整理されていないのが現状である。そこで本稿では、蒲松齢の詩（以下聊斎詩と称す）の研究の準備作業

として、聊斎詩の今日に至るまでの流伝の情況を概観し、更に蒲松齢関係の資料を豊富に所蔵する慶應義塾大学聊斎文庫の聊斎詩関係資料を紹介する。そして最後に、今後の聊斎詩研究に当たっての課題をいくつか論じてみたい。

二　聊斎詩の流伝

聊斎詩について『淄川縣志』《蒲松齢伝》[1]及び張元撰『柳泉蒲先生墓表』[2]は共に〝詩集六巻〟と記している。しかしながら『聊斎詩集』張鵬展序[3]には〝詩集五巻、詩餘一巻〟とあり、蒲立德『東谷文集』[4]にも〝詩稿五冊、詞稿一冊〟とあることから、〝詩集六巻〟の中の一巻は詞集であることがわかる。更に『聊斎詩草』高鴻裁跋[5]にはより詳しく〝五冊、一千二百九十五首〟とあり、この数字は蒲箬等撰《祭父文》[6]の〝詩賦詞章、凡千餘首〟とも符号する。

聊斎詩が上梓されたのは康熙年間の『淄川縣志』に《石隱園》《般河》《青雲寺》の三首が収録されたのが最初である。続いて乾隆年間の『国朝山左詩鈔』に十一首、嘉慶年間の『続山左詩鈔』に十三首が収録された。のち道光年間の『般陽詩萃』に至って、蒲松齢と同時代に詩名の高かった高珩（号念東）、唐夢賚（字豹菴）らと肩を並べて百四十五首が収録され、[7]更に同書の凡例は特に一条を割いて蒲松齢の表揚に充てている。[8]生前は無位無官の貧乏館師であった蒲松齢が、乾隆年間の『聊斎志異』刊行以来、少なくとも山東一帯に於いては徐々に詩名を揚げたことを物語る。しかし、いずれにしても民国以前に聊斎詩が単独で出版されたことはなく、また蒲松齢後裔による遺稿の保存状態が粗雑であった上に、[9]咸豊年間の劉德培の乱[10]及び同治元年の捻匪の乱[11]などで甚しい散佚に遭ったために、聊斎詩は久しく郷里の処々に埋没したままであった。

一九三六年、淄川縣城図書館館長路大荒の資料提供で、上海世界書局から『聊斎全集』が出版された。蒲松齢の専書

として『聊斎志異』以外の作品を集めた初めての刊本である。その中の詩集は孫錫嘏の訂定本『聊斎詩集』[12]上下二巻に基くもので、《偶感》に始まる計三百五十五首を収録している。路大荒は『聊斎全集』刊行後も更に蒲松齢関係の資料を捜集し、一九六二年、上海中華書局から『蒲松齢集』上下二冊を出版した。詩集の部は『聊斎全集』所収の詩に王仲衡所蔵『南游詩草』[13]、王怡之所蔵『聊斎詩集』[14]、欒調甫所蔵『聊斎詩草』[15]、『斉魯遺書』所収『聊斎詩草』[16]及びその他諸本[17]の詩を加えて重複を省き、王怡之本にしたがって康熙九年庚戌（蒲松齢三十一歳）から五十三年甲午（七十五歳）まで五巻に編年整理している。また作詩年次の不明確な作品は続録一巻にまとめており、合計六巻九百四十九首を収録している。続いて翌一九六三年、『蒲松齢集』第二版が出版された。これには『聊斎偶存草』[18]から蒲松齢三十代前半の詩作で初版未収録の七十九首が新たに加えられている。そこで収録総数は千二十八首に達し、高鴻裁跋に基く推定総数千二百九十五首に二百数十首を欠く数字になっている。現在のところ、この『蒲松齢集』第二版が聊斎詩を最も豊富に集めたテキストである。但し、このテキストも十全なものとは言い難く、作品の重複や編年の誤りなどが目立ち[19]、甚しきに至っては他人の詩が混入していることもあり[20]、今後改められるべき点が多い。

三　聊斎文庫所蔵の資料

（一）聊斎文庫について

聊斎文庫とは慶應義塾大学が所蔵する蒲松齢関係資料の総称であり、その資料の大半は故平井雅尾の蒐集によるものである[21]。平井氏は一九三九年、蒲松齢の郷里山東淄川の礦業所に医師として赴任し、以後折に触れて蒲松齢起居の足跡を尋ね、当地の各処から遺書稿本を蒐集した。そして平井氏の帰国後、蒐集された全資料が藤川一秋氏によって買い取

られ、慶應義塾大学に寄贈された。[22] 同大学中国文学研究室編『聊斎関係資料目録』[23]では、これを「聊斎遺著」「聊斎遺墨」「蒲立徳遺稿」「諸家雑書」「考拠」「雑」「画図」「蒲氏旧蔵書」の八項目に分け、総計五百餘件の蒲松齢関係資料を挙げており、そのうち「聊斎遺著」については更に(1)全集、(2)詩文集、(3)詩集、(4)詩、(5)文集、(6)文、(7)詞集、(8)小令鼓詞集、(9)小令鼓詞、(10)曲、(11)小説、(12)志異及志異拾遺、(13)雑著（勧戒）、(14)雑著（暦数）、(15)雑著（医薬）、(16)雑著（農書）、(17)雑著（訓蒙）、(18)雑著（雑）の十八項目に分類している。

（二）聊斎文庫所蔵の聊斎詩集について

聊斎文庫では三十五種の聊斎詩集を所蔵している。以下に第二章で挙げた諸本と合わせ、系統（グループ）別に分類して、その内容を簡単に紹介する。聊斎文庫にのみ所蔵される資料には上に◎印を附す。

〔A〕南游以前の詩集（蒲松齢三十一歳以前）

◎『聊斎詩集』聊斎文庫所蔵番号3・14・1　李堯臣選、東升堂王氏旧蔵、抄本一冊四十五題四十八首、全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩集』3・15・1　抄本一冊、3・14・1抄本を重抄

〔B〕南游期及び帰郷直後の詩集（三十代前半）

『蒲松齢集』巻一、『聊斎詩集』（王怡之所蔵）巻一、『南游詩草』（王仲衡所蔵）、『聊斎偶存草』

◎『聊斎集』3・2・1　蒲立徳抄本、一冊三十三題五十一首

◎『聊斎詩草』巻一　3・4・1　蒲松齢の子（箐、箎、笏、筠の中の一人）による抄本、一冊九十四題百二十五首

◎『聊斎詩草』3・3・1　抄本一冊、収録詩は3・2・1抄本と3・4・1抄本を合併したもの

◎『聊斎詩集』中巻　3・6・3抄本（平井雅尾編輯筆写三冊五百八十五題）の第二冊　蒲英萱家伝抄本を重抄

〔C〕乙卯から辛巳までの詩集（三十六歳から六十二歳まで）

『蒲松齢集』巻二巻三、『聊斎詩集』（王怡之所蔵）巻二巻三

〔D〕壬午から庚寅までの詩集（六十三歳から七十一歳まで）

『蒲松齢集』巻四、『聊斎詩集』（王怡之所蔵）巻四、『聊斎詩草』（欒調甫所蔵）

◎『聊斎草』　3・1・1　蒲松齢自筆詩稿、後述

◎『聊斎詩草』　3・5・1　蒲以隆抄本、子廷林旧蔵、一冊二十三題二十四首

◎『聊斎詩草』後編　3・6・3抄本の第三冊　3・1・1詩稿の抄本

〔E〕辛卯から甲午までの詩集（七十二歳から七十五歳まで）

『蒲松齢集』巻五、『聊斎詩集』（王怡之所蔵）巻五、『斉魯遺書』所収『聊斎詩草』

◎『聊斎詩草』前編第一、三部　3・6・3抄本の第一冊　三部に分かれ、第一部は蒲英祥家伝抄本を重抄、第三部は蒲英翠家伝抄本を重抄

〔F〕『聊斎全集』の系統の詩集

『聊斎全集』所収『聊斎詩集』、『聊斎詩集』（孫錫嘏訂定）、『般陽詩萃』、清華大学所蔵詩集、馬立勛所蔵詩集

◎『聊斎詩集』　3・16・2　孫星階所蔵『聊斎詩詞』を抄写した王滄佩抄本を平井雅尾の依頼で謝鴻聲が重抄、上下二巻、収録詩は『聊斎全集』と同一

〔G〕その他の系統の詩集

◎『聊斎詩集』　3・17・2　抄本上下二巻、収録詩は『聊斎全集』と同一

(a)◎『聊斎詩草』前編第二部　3・6・3抄本の第一冊第二部　二十六首、全首『蒲松齢集』未収

◎『蒲留仙詩集』　3・24・1　抄本一冊十四首、其中十二首が3・6・3抄本前編第二部と同一

◎『聊斎詩集別集』　3・34・1　抄本一冊百八題百十二首、其中二十二題が3・6・3抄本前編第二部と同一

(b)◎『聊斎詩集』　3・8・3　蒲立徳抄本を重抄、蒲文泉旧蔵、上中下三巻百二十六題百四十九首、全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩草』　3・9・1　抄本一冊、収録詩は3・8・3抄本と同一

◎『聊斎詩稿』前半　3・10・1　抄本一冊、前半が3・8・3抄本の上巻と同一

(c)◎『聊斎詩稿』　3・12・2　抄本上下二編、上下各六部：上編其一『聊斎詩文稿』六十一題、其二『聊斎詩集』四十七題、其三『聊斎詩文集』三十九題、其四『聊斎詩集』五十六題、其五『聊斎詩文稿』五十三題、其六書名不詳四十五題、下編其一『聊斎詩文集』六十三題、其二書名不詳五十題、其三書名不詳四十九題、其四『聊斎詩集』六十二題、其五『聊斎詩文稿』四十九題、其六『聊斎詩集』六十六題、以上全首『蒲松齢集』未収

◎『柳泉詩草』　3・13・2　抄本上下二編、3・12・2抄本と同一、但し各部の排列が異なり、また3・12・2抄本にない『柳泉詩草』蒲惹珍抄本二十九題を含む

(d)◎『聊斎詩集』　3・18・5　東安堂王滄佩旧蔵、抄本五冊三百六十題、全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩集』　3・19・1　抄本一冊、3・18・5抄本を重抄

(e)『国朝山左詩鈔』聊斎詩十一首を収録

◎『聊斎詩雑集』前半　3・22・1　抄本一冊、前半に『国朝山左詩鈔』所収の十一首を収録

(f)◎『聊斎詩雑集』後半第二部　3・22・1抄本の後半　三部に分かれ、第二部は《荷珠桂珠乩詩》連作十三首、『蒲松齢集』未収

◎『荷珠詩集』　3・28・1　抄本一冊、《荷珠桂珠乩詩》連作十三首及び無題詩三首

(g)◎『聊斎詩集』　3・23・3　抄本上中下三冊、上冊三十三題、中冊三十二題、下冊三十四題、上冊中の二十五題以外は『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩集別集』　3・34・1　抄本一冊、百八題中の七十四題が3・23・3抄本と同一

(h)◎『青雲集・知命集』　3・29・10　抄本十冊、詩六百七首、詞二百九十三闋、『庚申知命集』『壬寅青雲集』の如く作詩年次別に収録、全作『蒲松齢集』未収

◎『辛酉知命集』　3・30・1　平井雅尾抄本一冊、3・29・10抄本の一部と同一

〔H〕系統的に孤立した詩集

◎『聊斎詩稿』　3・7・1　蒲立徳抄本を重抄、一冊三十一題三十七首、全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩稿』後半　3・10・1抄本の後半　七十八題百十首、全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩集選抄』　3・21・1　抄本一冊二十七首、全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩雑集』後半第一、三部　3・22・1抄本の後半　第一部四十六首、第三部百四十首、いずれも全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩詞』　3・25・1　抄本一冊六首、全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩抄』　3・26・1　抄本一冊十二首、全首『蒲松齢集』未収

◎『聊斎詩抄』　3・27・1　抄本一冊二首、両首『蒲松齢集』未収

◎書名不詳　3・20・1　抄本一冊、前部欠損、天文門、時令門、地理門の三部門に分かれ、各部門は更に星類、春類、山類などの部類に分類、現存九十題、全首『蒲松齢集』未収

◎書名不詳　3・35・1　抄本残欠、現存三十八首、全首『蒲松齢集』未収

〔I〕蒲松齢以外の詩集

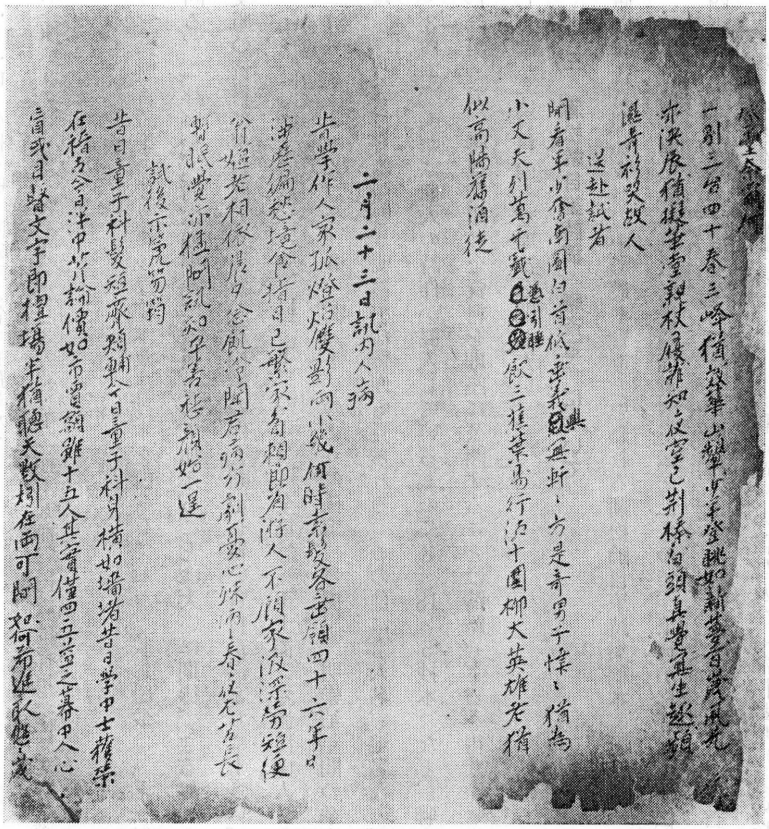
◎『聊斎詩稿』　3・11・1　抄本一冊、収録詩は全て王漁洋の作

◎『石隠園詩集』三種　3・31・2、3・32・2、3・33・1　抄本五冊、内容は孫坦『虎嘯集二集遺集』（21・2・1）と同一、詩題のみ改作

聊斎文庫ではこうした聊斎詩集の種々雑多な稿本及び抄本を所蔵しており、収録総数は『蒲松齢集』に未収録の作品だけで一千首を上回る。これらを『蒲松齢集』に増補として加えることは大いに期待できる処であるが、しかしながら残念なことに聊斎文庫の資料は玉石混淆であり、蒲松齢の作と断定し難い資料があまりにも多い。伝承過程の不明確な抄本が大半を占め、中には『聊斎詩稿』（3・11・1）のように全篇悉く王士禎（号漁洋山人）の詩を収めたものや、『石隠園詩集』（3・31・2、3・32・2、3・33・1）のように孫坦（号虎崖、明崇禎年間の挙人）の詩を収めて詩題のみ蒲松齢の詩集らしく改めたものなど、明らかな贋作も見られる。この他にも人名、地名などが蒲松齢の伝記と矛盾するもの（3・8・3抄本）或いは前人の詩作が混入しているもの（3・18・5抄本）など、聊斎詩集として疑わしき抄本が見られる。したがって、聊斎文庫の全資料を即座に公開することは躊躇せざるを得ない。今後慎重に調査を進めながら真偽を鑑別し、確かな資料のみを順次公開したい。

（三）蒲松齢自筆詩稿『聊斎草』について

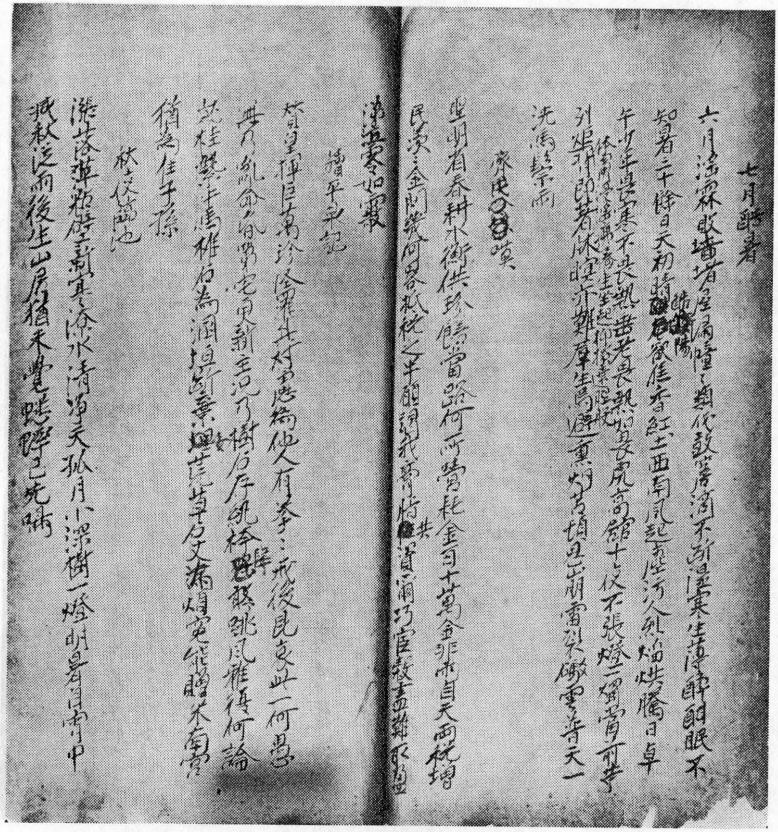
本稿では聊斎文庫の聊斎詩関係資料の中で最も貴重と思われる蒲松齢自筆詩集稿本『聊斎草』（所蔵番号3・1・1）を詳細に紹介する。この詩稿は蒲松齢の第八代後裔蒲英翠が伝えたもので[24]、筆跡から推して蒲松齢の自筆であることは確実である[25]。康熙四十一年壬午（六十三歳）から四十九年庚寅（七十一歳）まで九年間の詩作百九十題二百三十七首を収め、『蒲松齢集』ではちょうど巻四に当たる。以下に『聊斎草』の書型及び『蒲松齢集』との校勘を記す。



蒲松齡自筆詩稿『聊斎草』

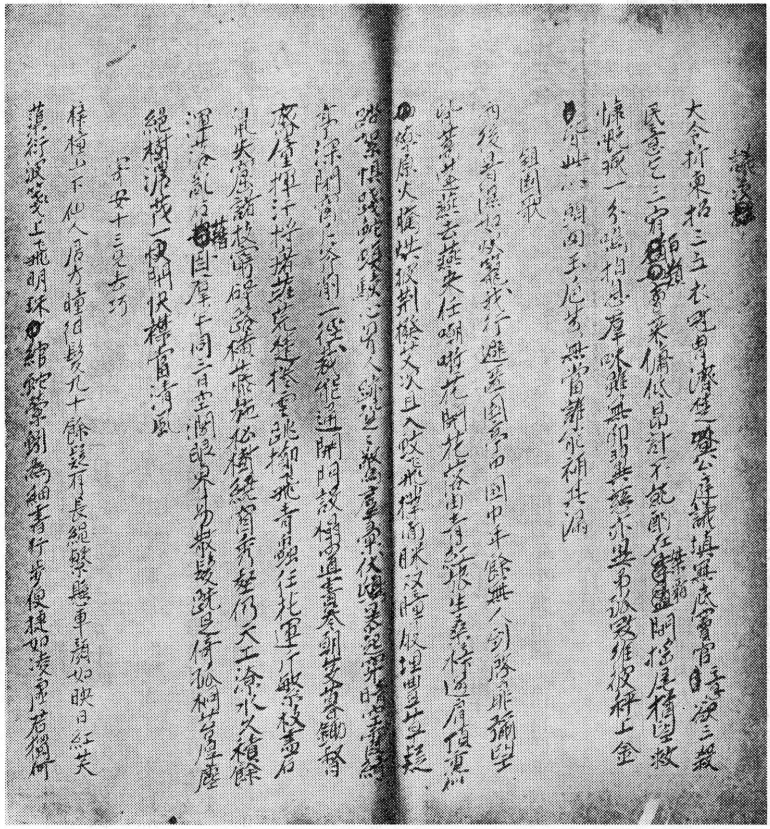
（圖一）

蒲松齡自筆詩稿『聊斎草』
(圖二)



蒲松齡自筆詩稿『聊斎草』

(圖三)



蒲松齡自筆詩稿『聊斎草』
(圖四)

〔書型〕

清朝康熙年間自筆稿本一冊。表紙は無地紙で堅二十四・六糎、横十三・五糎。無地紙の覆い表紙有り。外題(後補)は表紙左上に〝聊齋詩集〟と打ちつけ書き。外題下に二行で〝卷之□／五十四六頁〟、表紙右下に一行で〝自壬午起至庚寅止凡九年共二百六十二〟と注記有り。[26] 内題は一オ右上に〝聊齋草〟と書す。奥書無し。墨付五十六丁。毎半葉九行、毎行二十五字前後。極薄の竹紙。毎葉四辺に破損あれど全巻総裏打補修済み。二ウ、三オ、三ウはもと全面欠損せるものを裏打紙に後人が繕写。第三丁と第四丁は綴込み順が顚倒。一オ右下に正方朱印の残欠有り、判読不能。

〔校勘記〕

(1) 詩の排列及び詩題は『聊斎草』にしたがう。詩句は『聊斎草』のものを記し、下に『蒲松齢集』の異同を記す。(序及び注記も同様。)

(2) 異同のない詩は詩題のみを記す。

(3) 『聊斎草』の欠損が後人の筆で補われている箇所に於ける異同については上に＊印を附す。

康熙四十一年壬午　六十三歳

≪留客行≫五古一首

閒看年少奮南圖／白首低垂義興無　此二句次序顚倒、並義作意

≪二月四日往哭孫嗣服三台在目因憶二十許時兩人載酒登臨歌呼竟日曾幾何時故人已謝世矣適値辰日不能盡哀因託於詞≫七律二首

猶似高陽舊酒徒　似作是

≪二月二十三日訊内人病≫五古一首

蒲松齢集題訊作詢

≪送赴試者≫七律一首

≪試後示篪笏筠≫五古一首

＊尚與童子伍　尚作當

＊雲霄已騰擧　騰作騰

《清明中絳桃海棠並開病中感賦》七絶一首

＊蒲松齡集題中作日

《途中遙見山村紅綠如畫》七律一首

＊北山雲起如黃昏　如作欲

＊不堪病後寒侵首　首作骨

＊兩袂清風短策温　清風作風清

《久不晤子帥三月十七日相過流連日暮分手曰別矣五月四日可再晤耳至念九日訃音忽至而寤寐之期適是所訂再晤之辰悲哉奇矣》五律二首

勝志老尤堅　尤作猶

《錦邊蓮》七律一首

＊傭壯一淺紅生肉　傭壯一淺作慵妝一綫

《南山歌壽畢年伯母》七古一首

蒲松齡集題無歌字

南山盤石高龍嵸　盤作磐

休文尤嫌金帶重　尤作猶

＊子舍一點等鳳麟　點作賢

＊孫枝人士擬珪珙　人作八

＊含飴展笑庭幃歡　幃作帷

＊巨壑羣龍顧昂聲　顧作欲、聲作聳

＊八衰康强尚如昔　衰作衰

＊日倚東窗布被擁　倚作依

＊蒲柳弱質漸攏腫　攏作臃

＊大德六年方未艾　六作大

＊漬淺蓬萊潮不湧　漬淺作淺清

＊我發狂歌響秋蚕　蚕作蛩

《朱主政席中得晤張杞園先生依依援止不覺日暮歸途放歌》七古一首

＊先生卓勞絶世才　勞作犖

＊英英驥子皆龍□　□作媒

＊德星今方聚東井　今方聚東井作今日方東聚

＊斗南顧壓眉山摧　顧作欲

＊盛名日日喧吾耳　盛作高
＊彷彿百里聞風雷　彷彿作依稀
＊莽筵幸識紫芝面　莽作華
＊籠霄爽氣驚四座　爽氣作氣爽
＊劈海金翅翅九垓　劈作擘、翅九垓作凌九垓
＊談頃忽出明湖記　頃作傾
＊金石聲發有餘衰　衰作哀
＊久與罔兩向相語　向相語作相向語
《客邸》五律一首
《客秋》七絶二首
滿城荷葉裹粮糧　糧作糧
《中秋早眠》七絶一首
空使寒光焰客眠　焰作照
《別王玉斧》古体一首
慚無瑛瑤可相致　瑛瑤作瑤瑛
《寄紫庭》五絶三首
《自嘲》七古一首
此詩蒲松齡集編於康熙三十九年庚辰
吾徒蹴落仍蓊茸　蓊作鬱
眼中駑材策不進　材作才
傍睨憁憁爲熱中　睨作倪
《重陽》七絶一首
《題張杞園遠遊圖》七古一首
《過舜廟》七律一首
《夢王如水》五古一首
〔序〕自稷門歸　稷作濟
君欲見貽何遲也　無見字
君獨甘澹薄　澹作淡
僵眠如枯菌　眠作臥
《塞上苦寒曲》五古一首
凛風墮蹙趾　蹙作脛
鱗閣幾人能登　無登字　聊斎草後人誤加登字
《西成》五古一首
《哀梓巖》古体一首

〔序〕爲袁詞以傷之　詞作此

吟呻且讀猶能揮長篇　吟呻作呻吟

胡乃同巢烏　烏作鳥

遂使閨中嫠婦伶俜愬宰官　使作令

《拙叟行》古体一首

《途次作》七律一首

《十月初七日途中日暮》五古一首

駑鈍策不前　駑作駕

霞焰暮山紫　焰作照

歛光澹將夕　澹作淡

新月焰吟鞭　焰作照

《夜渡》五絶二首

《杜子美》古体一首

《讀三國志》五古一首

《謝阮亭先生遙賜古懽錄用黃太史題放鵰圖韻》五古一首

霜風下松秒　秒作杪

《華清》五古一首

妙舞罷霓裳　霓作衣

康熙四十二年発未　六十四歳

《四月十八日與笏過奐山風雹驟作》七古一首

《霪雨之後繼以大旱七夕得家書作》七古一首

《九日與同人遊池上載酒敲棋》七律一首

酒清觴滿蟹螯肥　酒清作清酒

《袁太君苦節序》七古一首

蒲松齡集題序作詩

〔序〕寡鶴興歌　鶴作孤

玉臺之脚三寸　臺作堂

尚恤縈桑之餓　縈作翳

悲煩鶴警　警作驚

修羅兵仗下如雨　仗作杖

剩有寒燈焰筐筥　焰作照

猶析糠糟賭鄰姥　析作淅、賭作膳

《十三夜微雨俗占雨云重陽不雨盼十三感而作此》七律一首

《蜚蟲害稼》七絶一首

《王玉斧忽至夜出壺酒對酌傾談》五古一首
《題玉斧立雪詩思圖》七絶一首
《喜二豆薄收》五古一首
伏暑苦亢暘　暘作陽
《冬初過石隱園即景》五古一首
秋秒禽聲殺　秒作杪
坐久良悲凄　良作涼
《又寄王玉斧》五古一首
凶年禁私酤　私作酒
《糠市》五古一首
冬春將如何　冬作各

康熙四十三年甲申　六十五歲

《正月二十喜雨》七絶一首
《王烈婦》七律一首
《二十五夜雪》七古一首
三冬暘亢如秋夏　暘作陽
《五月歸自郡見流民載道問之皆淄人也》五古一首
《流民》七絶一首
《居民》七絶一首
《餓人》七絶一首
《流民蒙君恩載送東歸》七絶一首
歸家尚得首丘死　丘作邱
《歷下》七絶一首
《離亂》七絶一首
《飯肆》七絶一首
《勸賑》七絶一首
又勸鄉紳賣豆糕　又作人
《邸報》七絶一首
《旱甚》七絶三首
《六月初八夜雨》七絶四首
肌骨乍清暑氣降　氣作風
《聞淄東無雨》七絶二首
《喜聞雨信》七絶二首
《齋庭獨坐》五律一首

返炤壁流霞　炤作照

《兒笏》五絶二首

《試牘》五古一首

《憂荒》五律一首

《紀災》七古一首

禾隴聚作風雨聲　隴作壠

隨擊憧憧半傾隕　擊作聲

賸有蕎菽待秋成　蕎作荍

千古奇災一時遭　奇作苛

《微雨》五絶一首

《蟲後僅餘蕎菽而久旱又將枯矣時雨忽零奈數里外未之沾及聞畢公漪對客雪涕感而作此》五絶二首

當期入深山　期作朝

相持爲一慟　爲作惟

《見刈黍慨然懷靖節》七絶二首

蒲松齡集題慨作慨

菊花酒熟已忘飢　熟作熱

虸蚄老去又蝗生　虸作野

《重陽前一日作》七律二首

里舍相看盡涕流　舍作社、盡涕流作涕盡流

《重陽畢萊仲邀集石隱園》七古一首

名園主人除朦地　朦作勝

握手咿噱開愁顏　咿作諛

《贈別丘行素》七律二首

蒲松齡集題丘作邱

君更遭逢較我艱　更作獨

《故人驚憔悴》五古一首

《密雲不雨》七絶一首

日日陰濃霧四垂　陰濃作濃陰

《遣懷》七絶一首

《夜小雨》七絶三首

《諸災並作秋稼已空十月猶旱麥田未耕月來雨頻降吾鄉並不及沾延息待蘇不免憾造物之偏也》五古一首

蒲松齡集題並不作獨不

又望來年秋　秋作收

《月夜薄陰》七律一首

《十月二十二日雨》七絶二首

《偶成》七律一首

《韓定州謝任歸田》七絶二首

蒲松齡集題謝作辭

《丘子行素師弟邀遊東流水》七絶一首

蒲松齡集題丘作邸

康熙四十四年乙酉　六十六歲

《上元日食粥隱落半齒》五絶一首

《奐山道中》七絶一首

《殘齒大痛》五絶一首

《告齒》五絶一首

《齒答》五絶一首

《三月赴郡途中作》七律一首

杏花卸盡燕飛飛　卸作邨

《客邸晨炊》七律一首

《陰雨連朝》七律一首

《道殣》五律一首

《口號》七絶一首

月終傳説要征糧　終作中

《四月十八日喜笏筠入泮》七古一首

並邀天幸被援拾　援作掇

《阮亭先生歸田二十四韻》五古一首

蒲松齡集題田作思

名字滿寀區　寀作寰

人自嚇鵷雛　雛作鶵

適入寀瀛圖　寀作寰

《贈朱尉》五古一首

曹椽清俸薄　椽作掾

《傷門人浣》五絶六首

朝猶課爾程　猶作游

《擬曾晳暮春遊沂水舞雩歸來詠》古体二首

《擬李員外之芳酬李邕杜甫登歷下古城皓湖新亭之作》五律二首

《賀人生子》七律一首

《代贈朱少府》七絶二首、五律一首、七律一首

美政頻從道路聞　政作路

村舍年來無吠犬　吠犬作犬吠

《代笏》五古一首

目中早已空　早作久

《畢韋仲呈高大尹》七律一首

風清花甸春城雨　花作月

共似乳嬰待慈母　似作以

祗披和氣戴仁天　披作被

康熙四十五年丙戌　六十七歲

《上元與族兄亮侄淳及兒孫篪笏筠輩登黌山》五絶二首

《登玉皇閣》七律一首

《途中風雪》七絶一首

聊齋草題下有注記曰十七

《四月初七喜雨》七絶一首

《山村》七律一首

《途中》五律一首

空山落焰時　焰作照

《聽雨》五律一首

《石隱園中作》七絶一首

《池萍》五古一首

《池萍掠盡》七絶一首

《暮雨》七絶一首

《早行》五絶一首

《夏客稷門僦居湖樓》七絶二首

《試後勉兒篪孫立德》五古一首

此生勿復望　勿復望作復何望

《示箬》七絶一首

《襄城李璞園先生遙寄佳章媿無以報作此奉答聊託神交之義云爾》七古一首

憐我佯狂遭不偶　偶作遇

頭童齒壑拈霜鬚　頭童作童頭

《寄王玉斧》七絶一首

《見王漢叟翩翩有父風乃歎林下必有清風誠然也作寄玉斧》七古一首

康熙四十六年丁亥　六十八歲

《元旦口號》七絶一首

《閒居》七絶一首

　村社豊年景物佳　社作舍

《二月朔日雪》五律一首

《朔日髮辮爲鬻工削去半尺》五絶一首

《清明後微雨馬上作》七律一首

《麥秋旋里》七律一首

　麥飯猶堪贍妻子　贍作贈

《口號》七絶一首

《避暑石隱園蓬蒿没徑借亭爲廩不可齋矣感而書此》七絶一首

《題壁》五絶一首

《七月酷暑》七古一首

　屋漏幢幢類伐鼓　漏作内

　一燭當前共列炬　共列炬作等烈炬

　葦生焉避熏灼苦　熏作薰

《齊民嘆》五古一首

《讀平泉記》五古一首

《秋夜臨池》五律一首

《議淡》五古一首

　官意欲三殺　三作相

　慷慨滅一分　慨作概

　鳴拍息葦咪　葦作郡

《鉏園歌》七古一首

　朝夕暮鋤督齋僮　鋤作鉏

　苔厚塵絶樹濃茂　厚作原

《寄安十三兄去巧》七古一首

　蒲松齡集題無安字

　塵毛揮落快何如　毛作尾

《八月十八日王德徵見贈獾褥云可愈痔》五古一首

《重陽前一日》七律一首

《重陽載酒柳亭作呈畢七兄萊仲》七古一首

蒲松齡集題無呈畢七兄萊仲六字

〔後記〕曩年遊此適遭疊荒萊仲以爲不祥負約不至故戲及之

此文作萊仲兄以曩年遊此曾遭疊荒遂以爲不祥另合遊隊而去佇望不至因醉放歌書呈寄□之

《紫薇花》七律一首

日日丹霞焰眼明　焰作照

攘着抑搔長影顫　着作首

鳴蜩愛蔭尤先占　愛作受

欲將紫艷鬬春荆　艷作燕

康熙四十七年戊子　六十九歲

《誌夢》七絶一首

《十六日途中得灰字》七律二首

袞袞紅塵逐馬來　袞袞作滾滾

《歸途大風》七律一首

此時家居閉蓬戸　閉作對

《二月十五赴郡作鈍塞行》七古一首

駑駘策頓無休息　頓作鈍

《風寒泛舟》七古一首

折過歷亭風逾猛　逾作愈

《出城見杏花》七絶一首

《旅邸》七古一首

《歷下吟》五古五首

祝士直草芥　直作如

獨乃至般陽　乃作自

《石隱園》七律一首

雨過松香清客夢　清作生

《擊魃行》七古一首

旱鬼已除旱逾甚　逾作愈

捉者被笞脛股斷　股作骨

旱魃倘能格雨露　倘作尚

《石丈》七古一首

幞頭韎韐吉莫鞋　吉莫鞋作□鞋蓑

《題石》七絶一首

《斂畢》五古二首

《寄李希梅》五古一首

《災禾歎》七古一首

竊喜久旱未全空　竊作且

一霜耑爲殺荻花　耑作專

《壽潘寧陽西村》七古一首

日臥萍鄉聽更鼓　萍作平

我願尤睩非此伍　睩作奢

《語内》七絶一首

《喜開府有遷報》七絶二首

〔後記〕時傳梅厓先生復起　無先生二字

《聽張道士彈琴》七絶二首

《唐子向以近作見示》七絶二首

我聽君歌甚怪之　歌作言

《又贈》五絶一首

《王司寇阮亭先生寄示近刻挑燈吟誦至夜夢見之》七絶二首

春樹暮雲日日看　暮作莽

《畢子光小閣落成索題戲爲長歌》七古一首

北眺蒼莽天欲盡　莽作茫

《短禾行》七古一首

《王玉斧諾賜蠶尾集久許不與偶因漁洋惠近詩夜夢索之戲柬一絶》七絶一首

蒲松齡集題無諾字

忽得漁陽惠好音　陽作洋

《病齒》七古一首

此詩蒲松齡集編於康熙四十四年乙酉

聊齋草題下有注記曰乙酉作

勢將彫謝無孑遺　彫作凋

康熙四十八年己丑　七十歲

《二十六日風雪》七律一首

大雪漫天時雨同　漫作滿

溝澮充盈何所益　充作皆

《初見耕者》五律一首

《輓朱子青》五律一首

此詩蒲松齡集編於康熙四十六年丁亥

《二兄新甫病甚彌留自言適至一處門額一扁大書黄桑驛或

謂余當居此入視之一望無際止寥寥數屋耳作此焚之》七絶二首

黄桑驛裏能相見　能作如

《大雪》七律一首

《風雪行》七古一首

《紅梅》五律二首

華妝對曉暉　曉作晚

雪中明炤眼　炤作照

《途次陰雨》七絶一首

《祝年詞》七古一首

《五月黄花》五絶二首

《十日雨》七律一首

下田高隴盡沾濡　隴作壠

《禾多災變慰藉農人》七古一首

平田漉漉散野水　田作地

《得家報》七絶一首

禾抽七尺無災變　抽作收

《暑夜》五古一首

窺鑽欞隙破　隙作隙

簟涼暑勢挫　勢作氣

敲窗侑清臥　清作情

《珍珠泉撫院觀風》七律二首

玉輪袞袞無時已　袞袞作滾滾

康熙四十九年庚寅　七十一歲

《斗室》七古一首

積土編蓬面舊壁　蓬作茅

叢柏覆蔭晝冥冥　蔭作陰

《寂坐》五古一首

《課農》五古一首

卓午課農歸　卓午作東阡

息意忘饞嚼　息意作安分

《惰奴》五古一首

果腹上東阡　東阡作壠畔

曳杖過其側　曳杖作偶爾

《示兒篪孫立德》五古一首

≪坐久≫五律一首　　≪大雪連朝≫七律一首

≪答畢振叔≫五古一首　　≪代王玉斧呈宋觀察≫七古一首

思歸臥蓬翟　翟作藿　　仁人行部吹煖律　部作步

以下に校勘の結果を記す。

まず編年に関して、以下の三首について『聊斎草』と『蒲松齢集』の間に異同が見られる。

①≪自嘲≫『聊斎草』では康熙四十一年壬午（六十三歳）に置かれているが、『蒲松齢集』は第一句〝皤然六十一衰翁〟にしたがって蒲松齢六十一歳の年即ち康熙三十九年庚辰に編年している。

②≪輓朱子青≫『聊斎草』では康熙四十八年己丑に置かれているが、『蒲松齢集』は『朱氏家譜』に基き、朱緗（字子青）の卒年即ち康熙四十六年丁亥に編年している。

③≪病齒≫『聊斎草』では康熙四十七年戊子に置かれ、題下に〝乙酉作〟と注記がある。『蒲松齢集』は注記にしたがって康熙四十四年乙酉に編年している。

次に収録詩に関して、『蒲松齢集』に収められている以下の二首が『聊斎草』には見られない。

①≪紅錦邊蓮≫『蒲松齢集』では康熙四十一年壬午に収録されている。この前後の詩（≪試後示篋笏筠≫≪清明中絳桃海棠並開病中感賦≫≪途中遙見山村紅綠如畫≫≪南山歌壽畢年伯母≫≪朱主政席中得晤張杞園先生依依援止不覺日暮歸途放歌≫）は『聊斎草』ではいずれも全句或いは大半が欠損しており、後人の筆で繕写されている。≪紅錦邊蓮≫一首はこれらと共に欠損し、繕写の粗漏により欠けたままになったものと思われる。

②≪張歴友李希梅爲鄉飲賓介僕以老生參與末座歸作口號≫『蒲松齢集』では巻四の最終年次康熙四十九年庚寅に収

録されている。この詩が『聊斎草』に欠けているのは、詩稿分巻の際に『聊斎草』の次の巻即ち巻五に混入したためと思われる。

また字句の異同に関しては、その起因によって以下の五種類に分けられる。(斜線の上に『聊斎草』、下に『蒲松齢集』の字句を記す。)

①発音の一致または類似

例：詞／此　穫／濟　良／涼　艶／燕　猶／游　漫／滿

②字形の類似

例：烏／鳥　鴛／駕　冬／各　愛／受　又／人　厚／原

③偏の有無または相異

例：袞／滾　倘／尚　暘／陽　偶／遇　逾／愈　蹕／脛

④意味の類似

例：使／令　謝任／辭任　早已空／久已空　勿復望／復何望

⑤文字の倒置

例：酒清／清酒　陰濃／濃陰　瑛瑤／瑤瑛　盡涕流／涕盡流

路大荒が『蒲松齢集』を編輯した際、詩集巻四は主に前掲の孫錫嘏訂定抄本『聊斎詩集』(即ち『聊斎全集』所収『聊斎詩集』)、王怡之所蔵抄本『聊斎詩集』及び欒調甫所蔵抄本『聊斎詩草』に基いている。(但し遺憾なことに、『蒲松齢集』巻四には校勘が明記されていないため、各抄本間の関係については未詳である。)『聊斎草』と『蒲松齢集』の間の

字句の異同は、自筆稿本である『聊斎草』から直接或いは間接的にこれらの抄本が作成された段階で生じたものである。その大半は単純な誤抄によるもので、字形が似ているものは筆抄者の見間違いであろうし、また発音が同じものは一人が原本を読み上げ別の一人がそれを聞いて抄した際に同音異義語に誤抄したという情況が考えられる。『蒲松齢集』はこうした誤抄を含む抄本を総合したものである故に不適当な詩句が多く、これらは全て『聊斎草』によって改められなければならない。以下にその具体例を挙げる。

《九日與同人遊池上載酒敲棋》七律

共插茱萸傍釣磯　　共に茱萸を插みて釣磯に傍う

酒清觴滿蟹螯肥　　酒清く觴滿ち蟹螯肥ゆ

『蒲松齢集』は〝酒清〟を〝清酒〟に作るが、仄起七言律詩の首聯下句であるから、平仄の格式の上で『聊斎草』の〝●○酒清〟（第二字が平声）が正しい。

《十月初七日途中日暮》七古

驅馬上西山　　馬を驅り西山に上る

駑鈍策不前　　駑鈍く策てど前まず

『蒲松齢集』は〝駑〟を〝駕〟に作るが、詩意は『聊斎草』の〝駑〟の方が適切である。

《鉏園歌》七古

苔厚塵絶樹濃茂　　苔厚く塵絶え樹濃く茂る

一開快襟當清風　　一たび快襟を開き清風に當たらん

『蒲松齢集』は〝厚〟を〝原〟に作るが、〝苔原〟は詩語として熟さず、『聊斎草』の〝苔厚〟の方が適切である。

≪夢王如水≫五古

〔序〕八月十九日自稷門歸　八月十九日稷門より歸る

『蒲松齢集』は〝稷〟を〝濟〟に作るが、山東の地名としては『聊斎草』の〝稷門〟が正しい。

この他にも『蒲松齢集』では≪袁太君苦節序≫〝修羅兵仗下如雨〟の〝兵仗〟を〝兵杖〟に作り、≪代贈朱少府≫〝美政頻從道路聞〟の〝美政〟を〝美路〟に作るなど、説明を要するまでもなく、『蒲松齢集』の詩句が不適当であることは明らかである。一方、中には筆抄者の好みで詩句を改作したと思われるもの（例：≪試後勉兒箎孫立德≫五古〝此生勿復望〟を〝此生復何望〟に改作）なども見られるが、いずれにしても原作を重んじる立場からは、これらも全て『聊斎草』にしたがって改め、聊斎詩のもとの姿を明らかにしなければならない。

このように『聊斎草』が聊斎詩の通行本を改訂する上で貴重なことは既に明らかであるが、更にもう一つ別の意味で『聊斎草』は資料的価値が高い。それはこの詩稿の中に蒲松齢が自らの筆で詩句に修正を加えた跡が見られる点である。以下にその修正の施されている箇所を記す。

〔自筆修正〕

(1)　詩題は修正後のものを記す。

(2)　詩句は修正前のものを記し、下に修正後の異同を記す。

≪送赴試者≫七律

白首低垂義氣無　氣改作興　　列萬牙籤足忘老　足忘老改作憑引睡

≪久不晤子帥三月十七日相過流連日暮分手……≫五律

題過與流連改作相過流連

臨穴已沾巾　已改作一

《南山歌壽畢年伯母》七古

瑯琊胄適尚書裔　裔改作家而後復改作裔

《客邸》五律

不復染霜髮　髮改作鬚

《自嘲》七古

枚蹇高志守不終　此句改作餘息尚存眼底空

《題張杞園遠遊圖》七古

誰者貌作湖海人　貌改作肖

將無似我杞園君　杞園改作老張

《過舜廟》七律

千古遊人弔舜皇　千改作萬

謨蓋當今存聖蹟　今改作時

孝名始一歷滄桑　始改作今

《夢王如水》五古

胸次何寥濶　濶改作廓

《西成》五古

日盼粟盈倉　粟盈倉改作盈高廩

《途次作》七律

野燒連雲炤暮天　炤暮天改作接暮煙

雁字斜飛沒遠煙　煙改作天

《十月初七日途中日暮》五古

懸車日將落　將改作欲

《夜渡》五絶

水流月光閃　月光閃改作光閃閃

《讀三國志》五古

無異東海濱　此句改作抱膝掩柴門

《霪雨之後繼以大旱七夕得家書作》七古

赤夏月餘無滴雨　月餘改作三旬

吾家婦子念餘口　念餘口改作三十口

《九日與同人遊池上載酒敲棋》七律

浮萍破處秋光動　處改作綠

《袁太君苦節序》七古

〔序〕意無望於慈悲　望改作求

金花箋將遺縹袋　袋改作帶

《十三夜微雨俗占雨云重陽不雨盼十三感而作此》七律

日有露零無日斷　日有改作天上

四海何曾得均沾　此句改作恨教隔轍不均沾

《蜚蟲害稼》七絶

題臭改作蜚

遙望青苗亦儼然　青改作禾

《冬初過石隱園即景》五古

風冷禽聲殺　風冷改作秋秒

《正月二十喜雨》七絶

又耐春陽數日乾　數改作二

《王烈婦》七律

慘悼國殤貞烈魂　悼改作絶

《二十五夜雪》七古

猶幸神君治盜嚴　此句改作昨夕捉去兩三頭

《五月歸自郡見流民載道問之皆淄人也》五古

滿道皆流民　此句改作流民滿道路

《流民》七絶

救荒自古無長策／鄭俠空勞畫伴圖　此二句改作鄭公遷

後流民死／更有何人爲畫圖

《居民》七絶

猶忍枵腹望秋成　猶忍改作忍將

《餓人》七絶

題餓人賣兒改作餓人

《飯肆》七絶

旅食不曾傍肆帘　不改作何

市中鼎炙何堪問　何堪問改作眞難問

《旱甚》七絶

祇緣庭樹尚婆娑　祇緣改作爲言

《六月初八夜雨》七絶

題夜聽雨改作夜雨

《聞淄東無雨》七絶

秋田拚少逢年望　秋改作薄

《喜聞雨信》七絶

題又聞雨信知昨傳傳誣改作喜聞雨信

何吝一方獨太偏　太偏改作不然

我道是誣剛不信　我改作人

忽聞得雨倍懽然　得雨改作雨信

《齋庭獨坐》五律

方佈田禾種　田禾改作禾麻

《兒笏》五絶

不爲第一流／難奪錦標歸　此二句改作小慙欲大好／莫怨垂頭歸

《試牘》五古

題閱試牘改作試牘

乃如幕中文　此句改作幕中不衡文

《紀災》七古

葉悴花焦望雨零　悴改作萎

《微雨》五絶

原有二首、第二首原作禾枯雨不及／與君爲伯仲／何日上高山／相持□一痛、而後削去

《蟲後僅餘蕎菽而久旱又將枯矣……》五絶

相期入深山　相改作當

祇恨有艸廬　艸改作田

《見刈黍慨然懷靖節》七絶

晚稼無多嘆久晴　嘆改作患

《重陽前一日作》七律

題重陽作改作重陽前一日作

臘底春殘當何似　殘改作前

人似雁行飛不斷　人改作逃

《贈別丘行素》七律

惡魔未了三生孽／酣醉姑求片息安　此二句改作三年亦復奈何許／萬劫應爲如是觀

《密雲不雨》七絶

日見陰濃霧四垂　見改作日

《夜小雨》七絶

題連日陰改作夜小雨

《諸災並作秋稼已空十月猶旱麥田未耕月來雨頻降苦鄉並不及沾延息待蘇不免憾造物之偏也》五古

題原作諸災並作西成望絶兩月以來大雨之降皆自奐山而止十月麥田未耕來春又無望矣因作天問何災同而澤異也

《偶成》七律

題遣懷改作偶成

珠爲飯粟桂爲薪　粟改作顆

靜收雪月煙霞趣　雪月改作泉石

瀛海於今波浪惡　波浪惡改作波不湧

太平猶幸古逸民　此句改作白頭喜作太平民

《殘齒大痛》五絶

皮骨皆爲病　病改作患

《三月赴郡途中作》七律

舊村入眼夢依稀　入改作經

《陰雨連朝》七律

東風遲日雁來初　雁改作燕

《四月十八日喜笏筠入泮》七古

蓬茅坐對空於邑　於改作邑

《阮亭先生歸田二十四韻》五古

題先生下原有望悞二字

事愁理蝌蚪　愁改作方

人笑嚇鵷雛　笑改作自

人自如春柳　自改作本

君方吟哨遍　方改作纔

《贈朱尉》五古

如何令尹下／有此清介臣　此二句改作慈惠出一尉／可愧封疆臣

《傷門人浣》五絶

固疑爾不壽　此句改作疑爾無長壽

幸我年已殘　我改作余

白髮臨長樗　臨長樗改作哭年少

眼枯氣亦銷　此句改作生人樂趣無

蘭蕙竟先彫　彫改作枯

繕寫初成冊　繕改作文

《擬李員外之芳酬李邕杜甫登歷下古城皓湖新亭之作》五律

遊馬雲中過　此句改作車馬雲中簇

新詩歷下傳　新詩改作篇章

《代贈朱少府》七律

風流仙尉最清勤　最改作自

《四月初七喜雨》七絶

枕上淋零連夜聽　淋零改作蕭蕭

遙想陌見草新蘇　遙想陌見改作窗前喜見

《山村》七律

近山爽氣欲成霞　近改作南、欲改作暮

《途中》五律

一路柳絲垂　此句改作道上柳如絲

偃蹇紅塵道／東風撲面吹　此二句改作款段風塵裏／吟思首低垂

《聽雨》五律

冀得免流亡　此句改作冀不隔年荒

《石隱園中作》七絶

題避暑石隱園改作石隱園中作

《池萍》五古

三點兩點綠方逞／三日匀鋪池色暝／時有銀鱗擲玉梭／雲開瞥見青山影　此詩改作潦水半枯池／下視如窺井／數日浮萍生／點點綠初逞／三日翠錦鋪／蒼蒼池色冥／驚蛙入水深／遊魚擲梭猛／綠破水天開／瞥見青山影

《試後勉兒箎孫立德》五古

題責改作勉

不羞濫竽留　留改作逃

徒造錢神謗　徒改作學

《見王漢臾翩翩有父風乃歎林下必有清風……》七古

題與王漢臾共話改作見王漢臾

風流自不墜　此句改作風雅猶不替

《閒居》七絶

題下原有注記曰丙戌歲暮作、而後削去

歲殘處處白梅花　歲殘改作春初

《清明後微雨馬上作》七律

趁煖黃花生北陌　北陌改作客路

《七月酷暑》七古

十辰欲焦香紅土　十辰改作酷陽

《齊民嘆》五古

題齊哭吟謠改作齊民嘆

佐資爾巧宦　佐改作共

《讀平泉記》五古

紈袴恣惡跳　恣改作肆

斷棄埋荒草　埋改作委

石丈漏煩寃　漏改作爲

《議羨》五古

題議羨謠改作議羨

猶如賣菜傭　猶如改作爭類

酌在季孟間　季孟改作桀貊

《鉏園歌》七古

熏如燎原火騰烘　如改作似

亂石散臥羣羊同　散改作藉

《寄安十三兄去巧》七古

君獨何修保健軀　保健軀改作壽容舒

《重陽前一日》七律

題伏枕改作重陽前一日

《誌夢》七絶

〔引〕忽得深院無人之句醒而憶之似有詩意遂成一絶　此文改作忽得句誌成之

《歸途大風》七律

題暫城歸途中大風改作歸途大風

《歷下吟》五古

自爲矢清公　爲改作謂

《擊魃行》七古

逐鼠不獲逢野老　老改作叟

《斂畢》五古

天高雁影遲　此句改作霜寒潦水清

《災禾歎》七古

竊意久旱未全空　意改作喜

《壽潘寧陽西村》七古

履聊漫借干將補　履聊改作穿履

撫嬰拔薤束溼薪　撫嬰拔薤改作拔薤撫嬰

《王司寇阮亭先生寄示近刻挑燈吟誦至夜夢見之》七絶

不是夢魂迷客路　客路改作中道

祇緣憊骨怯征鞍　祇改作徒

《王玉斧諾賜蠶尾集久許不與……》七絶

題王字上原有寄字而後削去、並許而改作久許

《祝年詞》七古

題喜雨改作祝年詞

冬春屑粟備乾餱　冬春屑粟改作溲合菽粟

集莧夜無矛弧憂　無改作免

《禾多災變慰藉農人》七古

題霪雨損稼改作禾多災變

《珍珠泉撫院觀風》七律

擧將池水方開府　此句改作遠波旁潤仍千里

《代王玉斧呈宋觀察》七古

繡蓋飛雲作春陽　作改作布

田舍家無鼠雀糧　無改作絶

寃氣化作雲飛揚　此句改作頌騰山谷聲飛揚

修正の性質は以下に示す通り様々であり、推敲の過程が窺えて興味深い。

①平仄を整えたもの

例：《居民》春夏無苗百里頻／猶忍枵腹望秋成　猶忍改作忍將

仄起七言絶句の承句であるから、〃忍將〃（●○第二字が平声）に改めた。

②押韻を整えたもの

例：《客邸》久拚明主棄／不復染霜髮　髮改作鬚

五言律詩の尾聯。他聯の韻字が〃孤／蘆／無〃（虞韻）であるので、脚韻を〃鬚〃に改めた。

③対偶を整えたもの

例：《九日與同人遊池上載酒敲棋》浮萍破處秋光動／暮霞生寒夕炤微　處改作綠

七言律詩の頷聯。下句の〝生レ寒〟の語句構造に合わせて、上句を〝破レ綠〟に改めた。

④類義語に置き換えたもの

例：《題張杞園遠遊圖》誰者貌作湖海人　貌改作肖

《飯肆》市中鼎炙何堪問　何堪問改作眞難問

⑤一句以上を大幅に改めたもの

例：《讀三國志》《二十五夜雪》《流民》《贈朱尉》《途中》など。特に、《池萍》は七言古詩を五言古詩に改め、《微雨》は第二首を全句削除している。

なお、修正の中には書き飛ばしの訂正と見られるものが多いことから、[27] もと別に草稿があり、『聊斎草』はそれを清書し更に手を加えたものであろうことがわかる。

四　聊斎詩研究の課題

ここまで本稿は聊斎詩研究の第一歩として、そのテキストについて調べた。以下に今後の研究に於いて特に課題になると思われる点をいくつか簡単に述べたい。

課題の一は、本稿に引続き聊斎詩のテキストの充実を図ることである。そのために聊斎文庫の資料が活用されるべきことはすでに述べた。本稿で紹介した自筆詩稿『聊斎草』の他では、特に3・2・1抄本『聊斎集』及び3・4・1抄

本『聊斎詩草』が蒲松齢の児孫による抄本として極めて資料的価値が高い。両抄本は主に南游期の詩作を収めたものであり、同じく南游詩を中心とする『蒲松齢集』巻一と校勘を行なうことによって、この時期の詩作に修正を加えることが期待できる。また『蒲松齢集』に未収録の資料については、3・14・1抄本『聊斎詩集』が蒲松齢二十代の詩作を集めたものと思われ注目に値する。通行本はいずれも南游以後即ち三十一歳以後の詩作のみを収めているが、当然それ以前にも詩は作られていたはずである。3・14・1抄本の詩は専ら鬺山、煥山、満井堂など淄川周辺の風物を詠じており、江南での幕賓生活のことにも畢際有宅での館師生活のことにも触れていない点から、南游以前の詩作であると思われ、また張篤慶（字歴友）、李堯臣（字希梅）らと共に歌ったものである点から、蒲松齢が当時彼ら同人達と鄧中社を組み、李希梅宅に寄寓していた頃の作と考えられる。[28] この他の抄本の中からも蒲松齢の作と認め得る詩は『蒲松齢集』に新たに加え、また同時に『蒲松齢集』そのものの再検討をも行なうことによって、テキストを聊斎詩のもとの姿により近づけることが、研究の基礎としてまず第一になされなければならない。

課題の二は、聊斎詩の詩風についてである。特に鬼才李賀の影響が濃厚に窺える点が興味深い。模擬作として≪秋閨擬李長吉≫及び≪馬嵬坡擬李長吉≫[29]の二首があり、また≪輓淮揚道≫では〃鬼雨〃〃湿螢〃〃鉛水の涙〃〃死者を迎える鬼火〃〃冷やかな翠燭（ひとだま）〃〃立籠める夜気〃など李賀独特の詩語を連ねており、この詩の他にも≪獨酌≫の〃粉蠹〃、≪夜電≫の〃鬼母の哭声〃、≪湖津夜泊≫の〃波に舞う龍〃など李賀の典故を用いた詩は数多い。[30] また聊斎詩を通読すれば、李賀の他に屈原、陶淵明、杜甫などの影響があることにも容易に気付く。[31] 今後こうした歴代の詩人からの影響に着目する一方、更に聊斎詩の当時即ち清朝初期の詩壇に於ける位置付けをも試みたい。当時、山東淄川には高珩、唐夢賚、畢際有[32]ら名士達で構成される文学サロンがあった。これには淄川縣知事の張嵋や南游時の主人である孫蕙らも含まれ、いずれ

も蒲松齢より年長で詩名の高い有力者であった。彼らはしばしば高氏載酒堂、唐氏志壑堂、畢氏石隠園に宴を設け詩を賦し合った。蒲松齢も畢家の館師としてここに仲間入りしており、聊斎詩には彼らとの応酬詩も数多く見られる。したがって、蒲松齢はこのサロンと前述の郢中社との二つの文人のサークルに属していたわけであり、こうした先輩や友人から吸収したものも少なからずあったであろう。そしてまた、彼らを通じて清朝屈指の詩宗王漁洋に接する機会を得たことも聊斎詩を語る上で見逃せない。[33] 聊斎詩の中には王漁洋の評語が遺されているものがあり、例えば〝纒綿蠧麗、臨春結綺に登るが如し、復た人間の閨闥に非ず〟(《爲友人寫夢八十韻》評)、或いは〝毫髪たりとも遺憾無しと謂う叮し〟(《寄家》評)のように、いずれも僅か数語ではあるが、ここに神韻派領袖の評価を窺い知ることができる。

課題の三は、聊斎詩を通じて『聊斎志異』に接近することである。聊斎詩そのものを研究対象とすることも意義あることではあるが、しかしながら蒲松齢は詩人ではなく、少なくとも当時の詩壇に影響力を持った人物ではない。その意味では、志怪伝奇小説の集大成であり文学史に確固たる地位を持つ『聊斎志異』の研究の補助的資料として聊斎詩を利用することの方がむしろ有益であるように思われる。聊斎詩の中には『聊斎志異』の執筆姿勢を窺える詩が少なくない。例えば《感憤》と題する七律：

漫向風塵試壯遊　漫に風塵に向かいて壯遊を試む
天涯浪迹一孤舟　天涯に浪迹う一孤舟
新聞總入夷堅志　新たに聞けば總て夷堅志に入む
斗酒難消磊塊愁　斗酒も磊塊の愁いは消し難し
尚有孫陽憐瘦骨　尚お孫陽有りて瘦骨を憐れめど

欲從元石葬荒邱　　元石に從いて荒邱に葬られんと欲す
北邙芳草年年綠　　北邙の芳草年年綠なり
碧血青燐恨不休　　碧血青燐恨み休まず

○磊塊愁　『世説新語』〔任誕〕阮籍胸中磊塊、故須酒澆之。○孫陽　春秋秦人、一名伯樂。○瘦骨　杜甫〈房兵曹胡馬〉胡馬大宛名、鋒稜瘦骨成。なお、〈感憤〉詩は王怡之本、孫錫嘏本等では題を〈十九日得家書感賦即呈劉子孔集孫子樹百兩道翁〉に作る。したがって、劉氏・孫氏を伯樂に、蒲松齢自身を名馬に喩える。○元石　康熙帝の諱玄燁の〝玄〟を避けて〝元〟に作る。千日酒に酔って棺の中で三年間眠り続けた劉玄石の故事に基く。(『搜神記』『博物志』)○碧血　『荘子』〔外物篇〕萇弘死於蜀、藏其血三年而化爲碧。

『夷堅志』(宋・洪邁)に喩える志怪小説を書き綴った背景には、こうした憤悶と厭世の思いがあった。この詩に込められた遣り場のない鬱屈した心情は『聊斎志異』の自序〈聊斎自誌〉に謂う所の〝孤憤〟[34]の情に他ならない。また〈同安邱李文貽泛大明湖〉には、

鬼狐事業屬他輩　　鬼狐事業　他輩に屬す
屈宋文章自我曹　　屈宋文章　自ずから我が曹

とあり、〝鬼狐事業〟である志怪は自分のなすべき仕事ではないと歌い、また〈次韻答王司寇阮亭先生見贈〉には、

志異書成共笑之　　志異　書成りて　共に之を笑え
布袍蕭索鬢如絲　　布袍　蕭索として　鬢　絲の如し

とあり、ここでは『聊斎志異』の執筆に対して自嘲の響きが読み取れる。『聊斎志異』が怪異癖の所産であることには違いないが、蒲松齢が鬼狐の世界へのめり込んで行った背景には、こうした不遇の生涯に対する〝孤憤〟の情や、正統

をはずれた文学に耽溺している自分に対する〝嘲笑〟の姿勢があったことも考慮に入れねばなるまい。

聊斎詩はこのように小説『聊斎志異』の研究に於ける副次的資料となり得るばかりでなく、その作者蒲松齢の研究に於いては主軸として活用されるべき重要な資料となり得る。一千首を越える詩が編年で遺されていることは、蒲松齢の生涯を追う上で誠に都合が良く、蒲松齢の年譜や伝記[35]には必ず多くの詩が引用されている。したがって、聊斎詩のテキストを充実させることは取りも直さず蒲松齢の伝記を正確にすることであり、また『聊斎志異』からは推し量ることのできない蒲松齢の性癖や思想の一面を聊斎詩の中から窺い得ることもあろう。

以上で序説を終わり、各々の課題について詳しくは稿を改めたい。

注

(1) 『淄川縣志』巻六人物志文学伝。原文抄録：〝所著有文集四巻、詩集六巻、聊斎志異十二巻。〟

(2) 『蒲松齢集』一八〇四頁。原文抄録：〝所著、文集四巻、詩集六巻、聊斎志異八巻。〟

(3) 『蒲松齢集』六八六頁。張鵬展は嘉慶年間広西上林の挙人で、嘉慶十五年から十七年まで山東学政を務める。『続山左詩鈔』編纂の際、蒲松齢の玄孫蒲庭橘から『聊斎詩集』を得、これに序文を題す。原文抄録：〝壬申余徵続山左詩鈔、於其嗣孫庭橘獲先生詩集五巻、詩餘一巻。〟

(4) 『東谷文集』巻三。蒲松齢の嫡孫蒲立徳（号東谷）が山東益都の王禹臣に宛てた書簡《与益都王孝廉禹臣》に見える。原文抄録：〝盛意下問先祖柳泉公詩文稿、将加選評、賜下大叙、不勝欣感、恨未能躬詣膝謝耳、今来使下臨、僅捜得文稿三冊、詩稿五冊、詞稿一冊、共九冊、奉覧。〟

(5) 『蒲松齢集』六八六頁。高鴻裁は光緒年間山東濰水の諸生で、『斉魯遺書』編纂の際、陳介錫（同治年間山東濰水の挙人）に『聊斎詩草』の跋文を嘱せられる。原文抄録：〝癸未夏、捜集斉魯先哲遺書、陳晉卿徵君出是編見貽、謂此獲自蒲先生後裔、手割数首入桑梓之遺、其餘不忍棄置、属余亟爲表揚、余受而読之、見其籤題共五冊、計一千二百九十五首、中更兵燹散佚、僅存九十七首爲一冊。〟

(6) 『蒲松齢集』一八一一頁。蒲箬は蒲松齢の長男。原文抄録：〝詩賦詞章、集而帙者凡千餘首、序表婚啓寿屏祭幛等文、計四百餘篇、暮年著聊斎志異八巻、毎巻各数万言。〟

(7) 『般陽詩萃』は般陽（淄川の旧名）に於ける唐から清までの歴朝詩作名鑑。高珩の詩百五十首、唐夢賚の詩八十三首を収める。なお、『淄川縣志』は高珩二十四首、唐夢賚十七首、『国朝山左詩鈔』は高珩五十一首、唐夢賚七十三首を収め、いずれも蒲松齢より収録詩数が遙かに多い。

(8) 原文抄録：〝蒲柳泉先生聊斎志異一書、盛行海内、士林想望鴻筆、得其一文一詩、雖吉光片羽、莫不珍若拱璧、其詩向無刻本、山左詩鈔僅載先生古今体十一首（中略）謹校増一百三十四首、窃願俟獲善本、再行校正、爲刻専集、以標風雅。〟

(9) 平井雅尾『聊斎研究』（一九四〇年韓国釜山にて排印）の「遺稿散逸之状況及松齢嫡流孫」の項に次のように言う。〝松齢翁歿後、在児孫中尚有文筆之素養、至之三代四代以下、則尽務農不事文墨、故不知遺稿之貴重、視爲紙屑而棄置、総之、松齢翁之後裔未有整理其遺稿者、此爲散逸之最大原因也。〟

(10) 前掲書の同項に次のように言う。〝拠族人云、咸豊年間有劉德培者、唱乱拠占淄川縣城、向各村放火奪掠、故蒲家莊亦於此時慘遭兵火之災、財物尽被掠奪一空、故遺稿亦損失大半云。〟

(11) 『聊斎先生遺集』孫星垣跋（注12参照）に次のように言う。〝先生所作、蔵於其家一小楼、後陰雨楼圮、遂多損壊、及同治壬戌、捻匪突至、復罹兵燹、焚毀無餘。〟

(12) 孫錫嘏（字東泉）は光緒年間山東淄川の貢生。族人孫星垣の『聊斎先生遺集』跋に次のように言う。〝先伯父東泉公、曾手録其詩二巻、散行与駢体文四巻、迨喪乱既平、先伯父多方求索、所得者僅十之二三、用以繕写成帙。〟また同集耿鶴峯跋に言う。〝星垣家有聊斎文集、詩鈔稿、嗣經兵燹散失、復加搜集、另編古近詩、分上下二巻。〟なお、范寧「関於旧抄本蒲松齢的聊斎詩文集」（一九六一年十月十五日『光明日報』）では、『聊斎全集』の詩集は清華大学所蔵詩集、淄川人馬立勛所蔵詩集及び『般陽詩萃』所収の聊斎詩を総合したものであるとしている。これらと孫錫嘏訂定本との関係については未詳。

(13) 康熙九年庚戌（三十一歳）から十年辛亥（三十二歳）まで孫蕙（字樹百）の幕賓として江南を巡歴した際の詩作で、《青石關》に始まる七十八首を収める。路大荒「蒲松齢的南游詩草介紹」（一九五七年四月二十一日『光明日報』、同氏『蒲松齢年譜』斉魯書社一九八〇年）に詳しい。

(14) 康熙九年庚戌（三十一歳）から五十三年甲午（七十五歳）までの詩集五巻五百三十三首（及び詞集一巻四十二闋）を収める。

巻一は『南游詩草』と同様に《青石關》に始まり、巻二から巻五は乙卯（三十六歳）から甲午（七十五歳）まで編年に並べられている。注3の『聊斎詩集』と同一。

(15) 康熙四十一年壬午（六十三歳）から四十九年庚寅（七十一歳）までの詩作二百三十一首を収める。

(16) 康熙五十年辛卯（七十二歳）から五十三年甲午（七十五歳）までの詩作九十七首を収める。注5の『聊斎詩草』と同一。

(17) 路大荒「整理蒲松齢詩文雑著俚曲的経過」（『中国史学会済南分会会刊』一九五六年第二期、前掲同氏『蒲松齢年譜』）及び同氏『蒲松齢集』編訂後記は、蒐集資料として上記(13)(14)(15)(16)の外に、広州中山大学図書館所蔵『聊斎詩文集』、北京図書館所蔵『留仙吟壇留跡』、聊斎故居所存『聊斎詩草』、淄川孫氏所蔵『蒲柳泉先生詩抄』、淄川西関『趙氏族譜』、王士禎『糸河飲餞図』、喩成龍・李興祖撰『歴亭詩文滙編』を挙げている。

(18) 袁世碩・馬瑞芳・郝浚共著「対聊斎偶存草的考察」（『蒲松齢研究集刊』第一輯斉魯書社一九八〇年）に詳しい。

(19) 袁世碩「初読蒲松齢集所看到的」（一九六三年二月三日『光明日報』）、劉階平『聊斎編年詩集選注』（台湾中華書局一九七四年）の「選注提要」などに指摘されている。また注18の論文の第四節及び第五節では、『聊斎偶存草』中の『蒲松齢集』初版既収録作品について、用字や編年が『聊斎偶存草』の方が妥当と思われる箇所がいくつか指摘されている。

(20) 李伯斉「竄入聊斎詩集中的幾首贋品」（『蒲松齢研究集刊』第三輯斉魯書社一九八二年）では、《趵突泉》二首《游龍寺》《暮春泛大明湖》二首《千佛山》《游大佛山》《白雲亭泛舟》《登歴下亭》《北渚亭》及び《環碧亭》の計九題十一首（いずれも続録の作品）が別人の詩作であることを明らかにしている。

(21) 前掲平井雅尾『聊斎研究』参照。

(22) 一九五三年十二月十六日『中央日報』は次のように報じている。〝中国偉大作家蒲留仙遺稿、未曽出版戯劇詩歌、又包括蒲氏所著有関天文農業著作等凡五百餘件、是平井雅尾医生先後歴三十年搜集、現爲一工業家収購、以捐贈与慶應義塾大学中国文学研究院。〟

(23) 『芸文研究』第四号一九五五年所収。

(24) 『聊斎草』を筆写した3・6・3抄本『聊斎詩草』後編の「編者之辞」（編者は平井雅尾）に〝此集所載皆蒲英翠家伝者、爲松齢真筆之詩稿也〟とある。

(25) 『聊斎草』の筆跡は稿本『聊斎志異』、蒲氏族譜『般陽土著』、『聊斎筆詩賦抄』、『鶴軒筆札』、蒲松齢画像題字など、すでに

蒲松齢の自筆と確認されている諸資料の筆跡と同一である。藤田祐賢「稿本聊斎志異考勘記」（『芸文研究』第六号一九五六年）参照。

(26) 表紙の外題及び注記はいずれも蒲松齢の筆跡ではなく、後人が補ったものと思われる。〃五十四六頁〃は〃五十四〃を〃五十六〃に改めたもので、〃四〃に墨で消却の印が見られる。〃二百六十二〃は現存の収録詩数二百三十七首と矛盾する。誤記とも考えられるが、或いは『聊斎草』に二十五首が欠損している可能性もある。

(27) 例えば《鉏園歌》の〃一開快襟當清風〃の句で〃一〃の下に〃快〃の字が塗去されているのは、〃開〃の字を抜かしたのを訂正したものであろう（圖四参照）。また《七月酷暑》で〃体膚浸淫痱癢生／坐起抑搔達脛股〃の二句が旁加されているのも同様である（圖三参照）。この類の修正は前記自筆修正の一覧では省略した。

(28) 《郢中社序》、《醒軒日課序》（共に『聊斎文集』巻二）参照。

(29) 《秋閨擬李長吉》は李賀《秋來》の〃雨冷香魂弔書客〃一句を借用しつつ李賀の閨房詩の印象を醸し出し、《馬嵬坡擬李長吉》は李賀《蘇小小墓》の詩体、用語、印象をそのまま模倣している。

(30) 本文に引用した詩語について、各々矢印の上に『蒲松齢集』、下に『李長吉歌詩王琦彙解』の用例を記す。

《輓淮揚道》鬼雨漫灑松楸樹、回頭鬼雨灑江樹↑《感諷》鬼雨灑空草

同詩　濕螢蒙滅流星矢、《覇王祠》秋草煙寒落濕螢↑《還自會稽歌》濕螢滿梁殿

同詩　霜草挹涙滴鉛水↑《金銅仙人辭漢歌》憶君清涙如鉛水

同詩　幽燈如漆迎新人↑《感諷》漆炬迎新人

同詩　冷翠燭花凝夜紫↑《蘇小小墓》冷翠燭／勞光彩、《雁門太守行》寒上燕脂凝夜紫

《獨酌》半生粉蠹爭膏火↑《堂堂》十年粉蠹生畫梁

《夜電》鬼母啾啾狐狸嘯↑《春坊正字劍子歌》嗷嗷鬼母秋郊哭

《湖津夜泊》驚起魚龍跳波舞↑《李憑箜篌引》老魚跳波瘦蛟舞

(31) 趙儷生「論蒲松齢的詩及其与聊斎志異的関係」（前掲『蒲松齢研究集刊』第三輯）にも同様の指摘が見られる。

(32) 高珩（号念東）は明崇禎十六年の進士、官は刑部左侍郎に至る。唐夢賚（字豹嵒）は清順治六年の進士、翰林院庶吉士散官より検討に至る。畢際有（字載績）は清順治二年の抜貢、明の戸部尚書畢自嚴の次男で、揚州府通州の知事を務める。

(33) 蒲松齢と王漁洋の関係については侯岱麟「蒲松齢与王士禎」(『読書』第六期一九七八年)、袁世碩「蒲松齢和王士禎」(『文史哲』第六期一九八〇年)、前野直彬『蒲松齢伝』(秋山書店一九七六年、其中「漁洋山人」の節)に詳しい。

(34) 原文抄録:〝獨是子夜熒熒、燈昏欲悉、蕭齋瑟瑟、案冷疑冰、集腋爲裘、妄續幽冥之錄、浮白載筆、僅成孤憤之書、寄託如此、亦足悲矣。〟

(35) 既刊の年譜、伝記には、路大荒『蒲松齢年譜』(前掲)、張景樵『蒲松齢年譜』(台湾商務印書館一九七〇年)、前野直彬『蒲松齢伝』(前掲)、劉階平『蒲留仙伝』(台湾学生書局一九七〇年)などがある。